

優生思想は終わっていない

2023-04-05



先月 28 日、旧優生保護法問題の早期・全面解決を求める院内集会に参加し発言する、れいわ新選組天島大輔参議院議員。

〈天島大輔議員事務所提供〉



Bora Lee-kil | 映画監督・脚本家

「私たちは、旧優生保護法が日本社会にもたらした障がい者差別と闘ってきました。障がい当事者による障がい者差別との闘いは、まさに優生思想との闘いでしたし、これからもそうでしょう。」

先月 28 日、旧優生保護法問題の早期全面解決を求める院内集会に参加した天島大輔参議院議員の言葉だ。現在日本では、旧優生保護法に基づき強制的に不妊手術を受けたり、人工妊娠中絶を受けた被害者が国を相手に損害賠償請求訴訟を起こしている。厚生労働省の調査によると、当事者の同意なしに行われた人工妊娠中絶を含め、約 8 万 4 千人が被害を受けている。国会議員 37 人を含め、オンラインとオフラインで 1,000 人以上が参加した集会で、原告は自分の被害事実を訴え、弁護士をはじめとする支援者たちはこの法律と闘うことの意味を説明した。彼・彼女らはまた、国会議員が法律を作る者としてどのような責任を負うべきかについても述べた。

その中でも、2019年に立ち上がり、(参議院に)計5議席をもつ「れいわ新選組」所属議員の言葉と表現に注目したい。元俳優の山本太郎氏率いる「れいわ新選組」が掲げる理念のひとつは、障がい者の権利拡大だ。所属議員を見れば、これが虚構ではないことがわかる。2019年参議院選挙の100日前に設立を宣言したれいわ新選組は、その選挙で比例代表2議席を獲得した。筋萎縮性側索硬化症(ALS)で全身麻痺の重度障がい者である船後靖彦氏と、脊髄損傷で脳性麻痺の重度障がい者である木村英子氏が車いすで国会に臨む。

2022年の参議院選挙では3議席を獲得し、四肢麻痺、発話障がい、嚥下障がい、視覚障がいをもつ天島大輔氏が参議院議員に加わる。彼は10代のときに医療ミスで障がいを負った。障がい当事者研究で博士号を取得、研究者としてはたらき、その後政治家になった。天島議員は、腕を引くサインによって介助者と意思確認をし文章を作るコミュニケーション方法(「あ、か、さ、た、な話法」)を通じて、ゆっくりと、しかし毅然と話す。

一よく働ける者、より強い者、より速い者、より美しい者が正しく偉いとするこの世の価値観に対し、共に手を携えられる人々とともに日常あらゆる面で自らの存在を賭けて闘い続けなければならない—

横塚 晃一「母よ！殺すな」

彼は、優秀な遺伝子を残し劣った遺伝子は排除しなければならないという優生思想に基づいて作られた優生保護法が派生した問題を解決することは、つまり障がい者差別主義と能力主義に疑問を投げかける行為だと言う。

それは、れいわ新選組の副代表である木村英子氏も同じだ。18歳までほとんどの歳月を施設で過ごした彼女は、親の意向を断ち切って自立生活運動に参加した。通りに出て「今日から私と一緒に生活しませんか」と書かれた横断幕を掲げ、自ら介助者を募った。木村議員はマイクに向かって口を開いた。

「複雑な気持ちでこの場にきました。優生保護法はなくなっても、この社会にはまだ差別が存在します。施設入所の条件として不妊手術を受け、子宮を奪われた友人がいます。私は幼い頃から施設で暮らしてきたので、生理をすることすら迷惑だと感じていました。いっそのこと、月経なんてなければいいのにとも思っていました」。彼女は脱施設当事者であり、強制不妊手術の被害者の仲間として、障がい者だから周りに迷惑をかけるはいけないというプレッシャーを背負って生きてきた人として語る。優生思想に基づく優生保護法は、障がい者を抹殺する法だと。

だれかが言う。優生保護法がなくなったのだからいいじゃないか、それは隣の国の日本にあった変な法律じゃないか、韓国にはそんな法律はないじゃないか、と。しかし、障がい当事者は言う。優生保護法はなくなったが、優生思想とそれによる差別は終わっていない、と。速く、強いことが正しい、望ましいという視点は根強く残っていると。それは日本だけの話ではない。韓国では2021年12月6日から始まった全国障害者差別撤廃連帯による、障がい者の権利・予算および立法のための宣伝戦が続いている。優生思想に基づく差別は終わっていない。